

令和元年6月25日現在

機関番号：34601

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2018

課題番号：15K01785

研究課題名(和文) 家庭的保育施設における戸外活動の実態と地域資源の役割

研究課題名(英文) Use of nearby public resources for Outside Activities of Family Day Care Facilities

研究代表者

辻川 ひとみ (TSUJIKAWA, HITOMI)

帝塚山大学・現代生活学部・准教授

研究者番号：70388883

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、待機児童問題の受け皿となっている地域型保育施設の中でも、園庭を持たないことから屋外保育活動が困難であることをデメリットと問題視されている家庭的保育施設に焦点を当て、施設が実施している戸外活動の実態を明らかにする事を目的とした。そこで、著者の既研究において抽出された、施設周辺の地域資源を用いて豊かな戸外活動を行なっている施設を対象とし、現地調査を行い、戸外活動の詳細な実態を明らかにした。さらに調査から得られた結果と施設周辺の物理的環境との関係から分析を進め、戸外活動の在り方や様々な地域資源利用の可能性、さらにそのために求められる自治体の協力体制などについても提案することができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

これまでに家庭的保育事業を扱った研究には、制度や保育内容に関するものが多く、施設内外の保育環境を建築学的視点から論じたものは散見されるにとどまり、十分に議論されてこなかった。しかし、家庭的保育事業が量的に拡充されている現状下で、本事業を多様な保育サービスの1つとして位置づける為には、園庭を持たない家庭的保育施設が戸外活動において、いかに周辺の地域資源を活用する事ができるかが重要な鍵となる。本研究では、園庭を持たない家庭的保育施設において、保育活動の中で重要となる戸外活動のあり方、また地域資源の活用方法や環境整備のあり方を提案する事ができたと考える。

研究成果の概要(英文)：This research analyzes in detail the outside activities of 10 family day care facilities around Japan that don't have their own playground for children, and the availability of nearby resources as parks, garden of temples, community centers, libraries, etc. for these activities.

The analysis of observational data shows that outside activities at nearby locations be classified in three types of activity; 1) physical development of children, 2) communicational development of children, and 3) cultural and social education. The conclusions of this study are 1) the importance of a good balance between these three types of activity, and the need of organized cooperation between family day care facilities and nearby resources and 2) the need of stronger communicational help from municipal government to enforce the effective use of near by resources by family day care facilities.

研究分野：建築計画

キーワード：家庭的保育 戸外活動 園外活動 散歩 地域資源 保育

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

待機児童の問題が深刻化している中、その受け皿としての家庭的保育事業の役割が年々大きくなってきている。少子化と女性の社会進出による保育所待機児童問題の早期解消が望まれる中、保育サービスの拡充に対し、柔軟に対応できる家庭的保育事業の実施の拡大が見込まれている。

家庭的保育を扱った既往研究には、家庭的保育事業が普及しない理由及び普及・定着のための課題、保育者に必要とされる研修体系を検討した小山らの研究(2009)や家庭的保育制度の位置づけが、「認知度が低い」「保育園の補完」「確固たる位置づけがない」という3つの認識にまとめることができるとしている相馬の研究(2004)など、家庭的保育の制度を取り挙げた研究、また家庭的保育を受ける児童の生活や学び、発達などを検討した保育内容に関する小野の研究(2003)がある。一方、保育環境に関するものには、松橋らの横浜市(1960-)の家庭保育福祉員に着目し、保育環境と周辺施設にある地域資源の使われ方・地域とのかかわりの実態を報告した研究(2009)、さらに京都の昼間里親(1950-)と大阪の保育所分園制度を対象とし、保育や子どもの発達の保障を支えるスペースとして活用されている施設外の屋外空間を利用するに当たって、何が都市空間整備に求められているかを論じた山田らの研究(2010)が挙げられる。このように家庭的保育を対象とした様々な分野の研究がなされているが、その多くは家庭的保育制度の位置づけや保育内容に関するもので、家庭的保育における保育環境を建築施設計画の面から扱った研究はほとんど見当たらない。

しかしながら家庭的保育の大きな特徴である異年齢保育に適した環境のあり方、また新たに事業を運営する場合の建物の改修計画および設備や家具の配置等における指針、さらには施設を新たに設置する場合の立地条件等が示されることは急務の課題であると考えられる。

2. 研究の目的

家庭的保育施設は、児童を保育者の居宅その他の場所において、3歳未満の乳幼児を対象に小規模で保育を行う保育サービスで、待機児童問題に関わる保育所の量的不足を補うものとして、平成22年には児童福祉法上に保育事業の一環として、平成27年には地域型保育事業の一つとして位置付けられた。しかし、小規模保育であるが故の問題点も多く挙げられ、保育の質の均一化と向上が図られている。本研究では家庭的保育施設が実施している戸外活動のあり方と戸外活動に関わる地域資源との関係から、家庭的保育施設の立地要件としての都市環境のあり方を示す事を最終目的とし、家庭的保育施設の保育の質の均一性と向上の一助になる事を期待している。著者の既研究¹⁾では、第1段階として施設が実施している戸外活動の活動状況と施設周辺の地域資源利用の概況を全国132件の施設に対するアンケート調査により示し、対象施設が立地する周辺環境の地域が、6つの地域特性タイプ^{注1)}に分類でき、戸外活動は施設から1200m圏域内で行われている事が多い事が分かった。又、周辺地域が1200m圏域に保有している地域資源は、「体力作りや自然に触れる」事のできる(以下「体」と示す)資源、「人と触れあふ、または集団体験ができる」(以下「人」と示す)資源、「教養・文化・社会の事象を学ぶ」事の出来る(以下「教」と示す)資源の3タイプの保育資源^{注3)}に分けられる事が分かった。また、アンケート調査で分析対象とした施設において、地域資源を多く保有し、且つそれらを戸外活動に利用している割合が高い施設^{注2)}を調査対象とし、「工業地」を除く5つの地域特性タイプに2件ずつについて施設長へのヒアリング調査を行った。結果、(1)分析対象施設が周辺の多様な地域資源を活用した数多くの戸外活動ルート^{注4)}を用意している事、(2)「体」資源や「教」資源を利用した戸外活動は、児童の年齢構成や体調等に適したルートが選択され、週から月単位で計画的に実施されていたが、(3)「人」資源を利用した戸外活動に関しては、施設によっては年に数回程度の実施で、積極的に利用されているとは言えない状況が明らかになった。そこで、本研究では、ヒアリング調査で調査対象とした家庭的保育施設が実施している戸外活動ルートについて追跡観察調査を行う事で、家庭的保育施設の戸外活動における活動内容の実態の詳細を明らかにし、地域資源活用の可能性と家庭的保育施設と地域との連携について考察する事を目的としている。

3. 研究の方法

表1に本研究における調査対象戸外活動ルートの概要を示す。現地調査は、既研究¹⁾で分析対象とした132件の「個人実施型」家庭的保育施設で、施設周辺1200m圏内に、戸外活動に利用できる地域資源を多く保有し、かつそれらを戸外活動に利用している割合が高い施設^{注2)}を調査対象とし、「工業地」を除く5つの地域特性タイプに2件ずつ調査した。10件の施設が実施している戸外活動のうち、各施設において月1回以上の頻度で行っている戸外活動の中から、各施設において高い頻度で行われている「体」資源、「教」資源を利用したルートと、既研究²⁾のアンケート調査で活用されにくい事が明らかとなった「人」資源を利用したルートについて、追跡観察調査を行った。また、施設長に対して、追跡観察調査を行ったルートにおける保育の狙いや資源を利用する上での工夫や問題点などについて、ヒアリング調査も行った。さらに、「人」資源および「教」資源を活用しているルートに関しては、連携保育施設の施設長や図書館の館長等、地域資源の施設長へのヒアリングも行い、家庭的保育施設に対する協力体制や協力を行う上での問題点等についても調査した。これらの調査結果から戸外活動の実態と地域資源活用の可能性を検討し、家庭的保育施設の立地に関わる都市環境のあり方を考察する。

表1 調査対象戶外活動ルートの概要

地域タイプ	密集住宅地				市街地				新興住宅地		
施設名	[BS]		[NO]		[OO]		[OP]		[YN]		[MN]
所在地	東京都	東京都	兵庫県	兵庫県	滋賀県	滋賀県	滋賀県	滋賀県	神奈川	神奈川	東京都
戶外活動タイプ	A (体)	E (体+教)	B (人)	E (体+教)	E (体+教)	B (人)	C (教)	E (体+教)	A (体)	D (体+人)	A (体)
目的地	公園大*1	スタジアム広場+複合商業施設	連携保育施設	公園大+自然センター	公園小+消防署	市民センター	図書館	港広場+路面電車(線路)	公園小a + 公園小b	神社+コミュニティハウス	公園小
実施頻度	ほぼ毎日(真夏を除く)	時々	週2回(真夏を除く)	週1回	週1回	月2回	月1回	週1回	週4~5回	年12回	ほぼ毎日(8~9月)
調査当日の児童数*2	3(0,1,3)	3(1,2,3)	5(1,2,2,3,3)	4(0,2,2,3)	4(2,2,2,2)	10(0,0,0,0,1,1,2,2,3,3)	11(0,0,0,0,1,1,1,2,2,3,3)	5(0,1,1,2,2)	3(1,3,3)	5(1,1,2,2,3)	5(0,1,1,1,1)
天気	晴れ	晴れ	晴れ	晴れ	晴れ	晴れ	晴れ	晴れ	晴れ	晴れ	晴れ
温度(°C)	25	12.9	14	25	29	28.2	26.5	25	23	25	27
湿度(%)	48	51	50	50	64	79	47.1	53	56	72	66
活動圏域(m)	657	836	780	684	418	313	543	812	263	505	92
活動時間(分)	142	192	90	84	45	110	102	85	66	128	49
目的地滞在時間(分)*3	106	100(70+30)	56	50(44+6)	17(14+3)	89	25	40(40+0)	36(26+10)	94(5+89)	32
移動時間(分)	36	92	34	28	28	21	77	45	30	34	17
移動距離(km)*4	2,611	2,772	1,720	1,785	997	904	1,516	1,153	960	1,347	264
出発時間	9:28	9:15	9:38	9:47	10:45	9:44	9:52	10:03	10:26	10:10	10:46
帰園時間	11:30	12:26	11:09	11:11	11:30	11:34	11:34	11:28	11:32	13:08	11:35
ルート	目的地型	散策型	目的地型	散策型	散策型	目的地型	散策型	散策型	目的地型	目的地型	目的地型
地域タイプ	開発完了住宅地				開発振興住宅地						
施設名	[MO]		[SI]		[HT]		[NM]				
所在地	滋賀県	滋賀県	北海道	北海道	東京都	東京都	神奈川	神奈川	*1 街区公園もしくはそれ以下の小規模な公園を「公園小」、近隣公園や地区公園を「公園中」、総合公園や運動公園を「公園大」と示している。		
戶外活動タイプ	A (体)	E (体+教)	B (人)	D (体+人)	A (体)	B (人)	A (体)	D (体+人)			
目的地	公園大+川沿い遊歩道	まちづくり館+おまんじゅう屋+寺	区民センター	高齢者施設+緑地	公園大	児童館	公園小	公園中+連携保育施設	*2 ()内は児童の年齢による内訳を示す。		
実施頻度	年1回	週1回	月1回	時々	時々	月の半分	ほぼ毎日	月1~2回	*3 ()内の数値は、目的地が2カ所ある場合の内訳を示す。また、事例[OP]の0は路面電車の見学で滞りによる見学等の行為が見られなかった事を示し、事例[MO]の0は川沿い遊歩道で魚を見ながら移動する行為は見られたものの、滞在が見られなかった事を示す。		
調査当日の児童数	5(1,2,2,3)	3(2,2,2)	5(0,1,2,2,2)	5(0,1,2,2,3)	5(1,2,2,2,2)	5(2,2,2,3)	3(1,2,3)	4(2,2,2,3)	*4 数値はグループとして移動した距離を示し、児童各人が個人に移動した距離は除いている。		
天気	晴れ	晴れ	晴れ	晴れ	晴れ	晴れ	晴れ	晴れ			
温度(°C)	22	19.5	30.5	29.4	22	18	26	21			
湿度(%)	60	58	52	59	65	71	56	68			
活動圏域(m)	897	245	95	265	1,260	896	78	595			
活動時間(分)	162	120	87	82	123	150	74	117			
目的地滞在時間(分)	102	57(37+11+9)	76	33(17+16)	45	82	48	80(31+49)			
移動時間(分)	60	63	11	49	78	68	26	37			
移動距離(km)	2,344	903	395	1,325	3,024	2,511	701	1,510			
出発時間	9:36	9:44	9:59	10:02	9:59	9:58	9:59	9:25			
帰園時間	12:21	11:15	11:26	11:24	12:02	12:24	11:13	11:25			
ルート	目的地型	散策型	目的地型	散策型	散策型	目的地型	目的地型	目的地型			

4. 研究成果

(1) 戶外活動ルートの概要 表1より、本調査対象戶外活動ルートの活動圏域は平均538.63mであったが、最も狭い活動圏域の戶外活動ルートは92m(施設[MN]Aタイプ)、最も広い活動圏域の戶外活動ルートは1,260m(施設[HT]Aタイプ)と大きな差が見られた。施設[MN]の調査時における受託児童は0歳児と1歳児で施設から遠く離れて活動する事は困難であり、また必要もないと保育者が判断したためであった。一方、施設[HT]における調査時の受託児童はほとんどが2歳児で歩行能力が十分であったため、施設からかなり離れた位置にあるが、様々な遊具や設備のある大規模な公園へ出かけていた。また、本調査対象戶外活動ルートにおける平均活動時間は105.68分で、その内移動時間が目的地での滞在時間よりも長かったのは19ルート中6ルートで、それら全てが家庭的保育施設から目的地まで最短距離で移動するのではなく、周辺地域を周って散歩するという「散策型」であった。目的地での滞在時間の方が長かった13ルートの内11ルートでは、目的地まで最短距離で移動し、帰りも同じルートを辿る「目的地型」であった。なお、これらすべての施設において、利用する地域資源の位置やその場所へのルートを示した「お散歩マップ」と呼ばれるものが、自治体の指示の有無に関わらず独自で作成されており、交通上の安全性が確認されたルートとなっているか、あるいは部分的に注意箇所を通過する際は、その注意点が詳細に示されていた。

(2) 家庭的保育施設の戶外活動と地域資源の利用実態 本調査対象戶外活動ルートにおいて、「体」資源を利用した戶外活動ルート(A、D、Eタイプ)では、様々な規模の公園や広場等

の地域資源利用が見られた。施設[MN] や施設[YN]、施設[00]、施設[NM]のように小規模な公園を活用した戸外活動ルートでは、0歳児から1歳児が砂場遊びをしていたり、2歳児から3歳児はブランコ、シーソー、滑り台といった遊具を用いて遊んでいたりする姿が見られた。一方、施設[NO]が活用していた総合公園など規模の大きな公園では2、3歳児が丘を駆け回ったり、大きな船の形をした複合遊具によじ上ったりと、より活動的な遊びが展開されていた。特に2、3歳児を複数名保育している場合には、大きな公園でより活発な運動ができるよう、公園が施設から離れていても、0歳児など年齢の低い児童はベビーカーに載せて出かけて行く傾向が見られた。

「教」資源を利用したルート(C、E、Fタイプ)では、無料で市民開放された自然センターで、水槽に展示された魚を観察したり、消防署で訓練をする隊員達の姿を眺めたりする行為が見られるとともに、既研究¹⁾で明らかになった、戸外活動における利用が最も難しい図書館を利用したCタイプの戸外活動ルートが見られた。図書館を活用していた施設[OP]では、月1回は施設から約500m離れた図書館を利用していた。図書館に着くとすぐに、エントランス前で保育士が児童に館内では騒がないよう指導している姿が見られ、館内では児童が各自で気に入った絵本を手にとったり、保育士が読み聞かせを行ったりしていた。又、児童が選んだ絵本を児童自身が貸し出しカウンターで直接職員に手渡し挨拶する等、職員との交流の場面も確認された。

図書館を初めとした「教」資源の利用は、既研究¹⁾から保育施設側が他の利用者への迷惑になると考え利用を控たり、一度利用しても図書館側から断られたケースもあり、利用し難いとされてきたが、本調査対象施設では、図書館を児童に多くの本に出会える機会を与える場所として活用しているだけでなく、児童にマナーを躰る場としても利用していた。一方、図書館は昨今の読書離れにより利用が減少する中で、これまでは静寂を保たなければいけない場であった図書館を、気軽にお喋りしたり読み聞かせを行ったりと、賑やかで活気のある場に変えようとする動きのある事が図書館長へのヒアリング調査から明らかになっている。家庭的保育施設の図書館の利用は、図書館側にとってもメリットに繋がると考えられる。

「人」資源を利用していたルート(B、Dタイプ^{注5)})では、連携保育施設だけでなく、児童館や市民センター、さらに高齢者施設(デイサービスセンター)等の地域資源が利用されていた。まず、施設[NO]が実施していた連携保育施設を活用した戸外活動ルートでは、連携保育施設の園庭で各保育施設の児童らがお互いに興味を持って話しかけ、一緒に遊ぶ交流行為が多く発生していた。

また、施設[HT]が活用していた児童館では、対象施設の児童らが母親に連れられた一般の児童らと交流する姿だけでなく、母親が保育士に育児相談をする場面も確認された。

施設[OP]が実施していた戸外活動ルートでは、施設から約300m離れた位置にある市民センターを利用し、地域の社会福祉協議会が運営した七夕イベントに参加していた。児童らは、子どもサロン(子育て支援の一環)のメンバーである一般の児童29名と長寿サロンのメンバーである高齢者23名と一緒に七夕の飾り付けを行ったり、歌を歌ったり等の交流をしていた。家庭的保育が少人数保育である故に問題として指摘される集団保育の欠如を、「人」資源である市民センターを活用する事によって補えるだけでなく、高齢者を含めあらゆる年代の人々と触れ合う機会が得られる事が確認された。施設[OP]が家庭的保育施設の開園について自治体から地域の社会福祉協議会へ連絡があった事で、施設長から行事参加の要望があった際、スムーズに受入を行う事ができたという。又、七夕イベントでは地域の2件の公立保育園から保育士が各1名参加しており、施設[OP]の施設長1名を加えた3名がこどもサロンの運営に協力していた。施設[OP]では七夕イベントの他にも、年に6回程度、地域住民の子育て支援や育児相談を行っている。市民センター等の「人」資源の利用には、自治体を初めとした地域全体の協力だけでなく、家庭的保育施設が独自で活動の場を広げる努力をする必要があり、多くの労力を要するが、家庭的保育が地域に周知され、地域における保育拠点となる事にも繋がっていくと考えられる。

さらに、施設[SI]では、高齢者施設(デイサービスセンター)を月1回程度活用していた。高齢者施設の滞在時間は17分程度と短いものの、高齢者施設に滞在している高齢者の前で挨拶をしたり、歌を披露したり、全員と握手をしたりと、十分な交流が見られた。児童は高齢者施設を初めて訪問した際は、戸惑いの態度を見せるものの、数回の訪問によって自然に打ち解けていく事が施設長のヒアリング調査から明らかになっている。核家族化が進み、老いを醜いものであると考える若者が増加している中、このような多世代交流は若い児童にとって、教育面でも貴重な体験であると言える。一方、高齢者の中には乳幼児との面会時に涙ぐんで感謝する高齢者や月一回の訪問を心待ちにする高齢者も多くいる事が高齢者施設長のヒアリングから明らかとなり、本調査対象戸外活動ルートでは両施設にとってメリットが確認された。

本調査対象施設では、家庭的保育事業のデメリットと言われている「集団体験」を補う為に、連携保育施設が十分に活用されている事例が見られた。また近隣に連携保育施設が無い場合や、連携がうまく行っていない場合、児童館や市民センター等が「人」資源として利用されていた。さらに高齢者を含む異なる世代の人との関わりを求めて、市民センターやデイサービスセンターを積極的に活用し、多世代を繋ぐ地域連携活動の中心としての役割まで果たしている施設も確認できた。

(3)まとめ 家庭的保育施設における戸外活動は、体力づくりや自然に触れる事を目的とした

活動、 同年齢時との集団体験や、高齢者等の様々な年代の人々と触れあう事を目的とした活動、 教養や文化、社会の事象を学ぶ事を目的とした活動など、可能な限りバランスよく行われるべきであり、それらを適える地域資源が施設を中心とした児童の徒歩圏内にある事、さらに地域資源到着までの散歩ルート上の安全確保が、家庭的保育施設の設置条件に加えられべきであると考えます。また、実際に地域資源を活用するためには、自治体による地域資源との連携サポートや、資源の活用方法のレクチャーなどの研修が個々の施設に対して行われる必要があります、これらが家庭的保育施設の均一的な質の担保と向上に繋がると考えられる。

表 戸外活動タイプ

戸外活動タイプ	保育資源タイプ		
	体	人	教
Aタイプ			
Bタイプ			
Cタイプ			
Dタイプ			
Eタイプ			
Fタイプ			
Gタイプ			

<注>

注1) 地域特性タイプは、「密集住宅地」、「市街地」、「新興住宅地」、「開発完了住宅地」、「開発新興住宅地」、「工業地」の6タイプであった。

注2) 前報におけるアンケート調査結果より、体、人、教の3つの保育資源タイプのうち、全てのタイプの資源を周辺地域に保有し、かつ2タイプ以上の保育資源タイプの地域資源において、利用地域資源割合が25%以上の施設を利用地域資源が多い施設と考えた。

注3) 各施設が行っている戸外活動は、保育資源タイプの組み合わせから、表に示す7種類のタイプが考えられた。

注4) 戸外活動のルートとは、施設を出発し、利用する地域資源を目的地、あるいは立ち寄り先とした一連の戸外活動経路を示す。

注5) Fタイプの戸外活動は、施設[YN]に1ルートのみ見られたが、年に1回の頻度であったため、追跡観察調査は行わなかった。

<引用文献>

- 1) 辻川ひとみ、中野明、「個人実施型」家庭的保育における戸外活動状況と地域資源（家庭的保育施設の計画と運営に関する建築計画的な研究 その2）、日本建築学会大会学術講演梗概集、pp.349-350、2014.9
- 2) 黄瀬綾、辻川ひとみ、中野明、「個人実施型」家庭的保育施設の戸外活動に関する研究 その1(家庭的保育施設の計画と運営に関する建築計画的な研究 その3)、日本建築学会大会学術講演梗概集、pp.259-260、2015.9
- 3) 辻川ひとみ、黄瀬綾、中野明：「個人実施型」家庭的保育施設の戸外活動に関する研究 その2(家庭的保育施設の計画と運営に関する建築計画的な研究 その4)、日本建築学会大会学術講演梗概集、pp.261-262、2015.9

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 1件)

辻川ひとみ、家庭的保育施設の戸外活動における地域資源利用の実態に関する調査研究、帝塚山大学現代生活学部子育て支援センター紀要、査読なし、3巻、p.p.109-116、2018.03

〔学会発表〕(計 2件)

辻川ひとみ、家庭的保育施設の戸外活動に関する研究 その3(家庭的保育施設の計画と運営に関する建築計画的な研究 その5)、日本建築学会大会学術講演梗概集、p.p.87-88、2016.08.24

辻川ひとみ、家庭的保育施設の戸外活動に関する研究 その4(家庭的保育施設の計画と運営に関する建築計画的な研究 その6)、日本建築学会大会学術講演梗概集、p.p.447-448、2017.07.20

〔図書〕(計 0件)

6. 研究組織

(1)研究分担者 なし

(2)研究協力者

研究協力者氏名：中野明(元帝塚山大学教授)、鈴木道子(元NPO法人全国家庭的保育連絡協議会 理事長)

ローマ字氏名：Akira Nakano、Michiko Suzuki

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。